

# 英語授業でのオンライン英会話プログラム導入の 成果と課題

米 崎 里・田 中 幹 大

## The Issues and Effects of Introducing an Online English Conversation Program in an English Course

YONEZAKI Michi and TANAKA Mikihiro

**Abstract** : The Department of English for Global Communication in cooperation with Edulix, Inc. has begun an online English conversation program called ‘English to Go.’ Students use Skype or Google Classroom to have a 25-minute online conversation with an instructor in the Philippines. These conversations are supposed to be conducted individually outside the classroom. After the conversation, students write a journal on a reflection sheet. Meanwhile, the Japanese course instructors organize their class based on the repetition of tasks in order to enable students to have a more successful online English conversation. The online English conversation program will continue for two years. This paper will examine the first year’s results based on the analysis of students’ questionnaires, self-evaluations based on the Department’s English Learning Passport, and the results of an external English proficiency test. In addition, this paper will examine the effects and challenges on the students’ motivation and the improvement of their English communication skills.

**Key Words** : Online English Conversation, Speaking, Motivation, Confidence

**要旨** : 国際英語学科では、英語コア科目 English to Go の授業で Edulinx（株）と提携し、オンライン英会話プログラムを取り入れ、学生たちの英語コミュニケーション能力の向上に取り組んでいる。学生は Skype や Google Classroom でフィリピンのインストラクターと 25 分間、オンライン英会話を授業外で各自行い、オンライン英会話振り返りシートを記入する。一方、授業担当者は学生たちがオンライン英会話を成功するために task repetition をベースに授業を組み立てる。オンライン英会話プログラムは 2 年間継続するが、本稿では 1 年目のプログラムの取り組みを、学生への質問紙調査、国際英語学科の English Learning Passport における自己評価、外部英語能力試験の結果から検証する。さらに、オンライン英会話プログラムの導入が学生への英語学習意欲や英語コミュニケーション能力の向上にどのような影響をもたらしているか成果と課題を考察する。

**キーワード** : オンライン英会話, スピーキング, 動機付け, 自信

### 1. はじめに

国際英語学科では、新カリキュラムに伴い、1 年生と 2 年生の英語必修科目 English to Go I/II/III/IV の授業で、Edulinx（株）（以下 Edulinx とする）と連携しオンライン英会話プログラムを取り入れ、学生たちの英語コミュニケーション能力の向上に取り組んでいる。

オンライン英会話では、学生はパソコンや iPad またスマートフォンを使い、Skype や Google Classroom を通し

て、フィリピン人英語インストラクターと1対1で25分間の対話を行う。学生たちは授業外でオンライン英会話を1週間に1度行う。EdulinX 提供のプログラムでは、半期に12回、1年間で24回オンライン英会話を行うよう設定されており、英会話のディスカッションのテーマは学習者の英語能力レベルに応じて決められている。ディスカッションのテーマは日常的な内容が多いが、社会的なテーマやビジネスに関するテーマも含まれている。また会話で必要となる語彙や言語材料は e-learning<sup>1)</sup>で学習できるように設定されている。オンライン英会話と e-learning は授業外で行うことになっており、授業では学生たちがオンライン英会話を成功するための事前学習や事後学習を行う(詳細は2.2を参照)。

オンライン英会話プログラムを取り入れることにより、英語教育上で期待される効果は主に下記4点が考えられる。

- ①1対1の英語による対話により、実践的にコミュニケーション能力を身につけることができる
- ②即興的なやりとりが求められ、より authentic な場面と英語を使う機会を持つことができる
- ③事前学習と事後学習を取り入れることにより、学習習慣が確立される
- ④英語を使うことにより、自分の英語能力や学習を客観的に振り返ることができ、メタ認知能力を高めることができる

これまでのオンライン英会話に関する先行研究では、英語教育効果として英語学習意欲の向上(畠山, 2017; 渡慶・Fewell・津嘉山・Kuckelman, 2017)が報告されている。また小林(2020)はオンライン英会話学習を通してスピーキング不安の軽減、自己肯定感の向上、英語学習への肯定的影響を報告している。一方、スピーキング能力への向上に関しては、一定の効果が見られたという研究もあれば(例えば深田, 2019)、効果の傾向が見られるものの、サンプル数の不足等で一般化できないという研究もある(例えば大和田, 2016; 江口, 2019)。

本研究では英語教育上で期待される効果と先行研究を踏まえて、以下のリサーチ・クエスチョンを設定する。

RQ1: オンライン英会話プログラムは、学習者の英語に対する自信や英語学習意欲に効果をもたらすか。

RQ2: オンライン英会話プログラムは、学習者の英語能力の向上に寄与するか。

オンライン英会話プログラムの授業への導入は2年間継続するが、本稿では2020年度国際英語学科入学者の1年目の取り組みを報告する。

## 2. 授業の概要

### 2.1 授業形式

1年生の履修科目 English to Go I/II の授業担当者は6名(専任2名, 非常勤講師4名)である。授業の概要を表1に示す。

表1 授業の概要

学年	1年
教員	教員 A      教員 B      教員 C      教員 D      教員 E      教員 F
授業教材	ブレンドマテリアル (EdulinX 提供) + 授業担当者独自の補助教材
家庭学習	オンライン英会話・e-learning (EZ to Talk 2)・振り返りシート
フィードバック	オンライン英会話を終えるごとに振り返りシートに記入し、授業担当者に提出。 提出した振り返りシートに対して、授業担当者はフィードバックを行う。
期末テスト	学期末は各自のテスト、オンライン上で Progress Test を実施
事前・事後アンケート	大学からの授業アンケート + 授業独自のアンケート
評価	e-learning (EZ to Talk 2) 24回分を終了すること、オンライン英会話を12回終了することを単位認定条件とする。それ以外に、各授業での期末テストや小テスト、パフォーマンステストなどを加えて、総合的に評価する。

表1において、網掛け部分(家庭学習・フィードバック・事前/事後アンケート・評価)は授業担当者間で統一した項目であり、網掛けになっていない部分は授業担当者の裁量による項目である。授業担当者間で統一した

具体的な内容は、以下の通りである。

- ①オンライン英会話や e-learning は家庭学習で行い、授業では扱わない。
- ②オンライン英会話終了後は振り返りシートに記入し、会話の振り返りを行わせる、そしてその振り返りに対して何らかの形で教員がフィードバックをする。
- ③学期末に共通のアンケートを実施する。
- ④e-learning とオンライン英会話を終了することが単位認定の条件とする。評価は授業内での筆記テストやパフォーマンステストなどを加えて総合的に評価する。

なお、授業教材や期末テストの内容、そして授業方法は授業担当者の裁量に任せた。

## 2.2 授業内容

授業内容や方法は各授業担当者によって異なるが、本節では授業の一例を記す。この授業では1コマ2部構成となっている。1つ目の段階は、オンライン英会話に向けての事前学習である。学生たちは家庭学習でオンライン英会話に必要な語彙や言語材料の学習を e-learning で行っておく。そして授業ではブレンドマテリアル<sup>2)</sup>を用いて、学習した語彙や言語材料を使うことを目的とした活動を行う。

2つ目の段階は、オンライン英会話への事後学習である。オンライン英会話後学生は英会話の振り返りを振り返りシートに記載し、授業担当者に提出する。うまく答えられなかった質問や答えることが難しかった質問を授業で取り上げ、教師が例を示したり、ペアで考える活動を行う。またペアワークで一人が学生役、一人がインストラクター役となり、英会話のやりとりを再現する。

期末テストにおいては、e-learning で学習した内容を筆記試験で課し、またスピーキングやライティングのパフォーマンステストとしてオンライン英会話のトピックを使用する。以上のようにこの授業では、repetition task<sup>3)</sup>（タスクの繰り返し）の要素をふんだんに取り入れ、学習の定着を試みている（図1参照）。

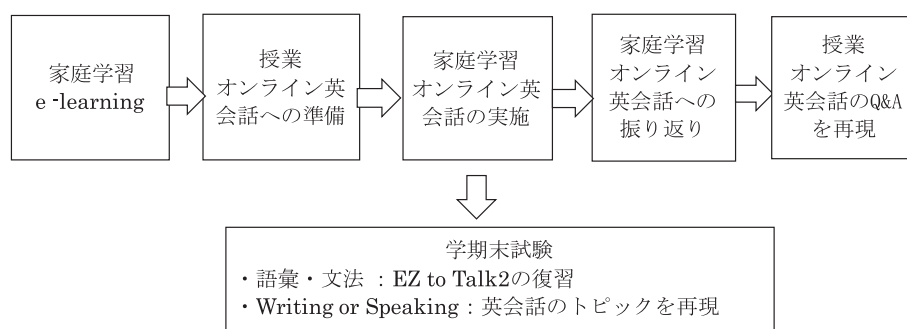


図1 授業内容と構成

## 3. 調査方法

### 3.1 調査対象者

2020年の国際英語学科に入学し、English to Go I/II を履修し、全ての質問紙に回答した1年生103名を調査対象とした。

### 3.2 分析方法

RQ1「オンライン英会話プログラムは、学習者の英語に対する自信や英語学習意欲に効果をもたらすか」に対しては、各学期末に実施した学生たちへ質問紙調査の結果を分析する。また質問紙の自由記述の回答（テキストデータ）をKH Coderに読み込み、計量的分析を行う。

RQ2「オンライン英会話プログラムは学習者の英語能力の向上に寄与するか」に対しては入学前と後期末に実施した外部英語能力試験 GTEC Academic の結果を用いて検証を行う。また学科の English Learning Passport を使い、学生の英語能力に関する自己評価の推移も検証する。

## 4. 結 果

### 4.1 RQ 1 に関して

質問紙の質問領域は、学習エンゲージメント (3 問)、内的価値 (2 問)、自己効力感 (2 問)、授業への評価 (2 問) の合計 8 問であるが、ここでは RQ 1 に関連する 3 つの質問項目 (英語を話すことの自信に関して、英語学習へのモチベーションに関して、英語学習の取り組みに関して) のみを取り上げ分析する。また質問紙の自由記述回答部分のテキスト分析も試みる。

#### (1) 英語を話すことの自信に関して

英語を話すことの自信に関する質問は、入学時にも学生に尋ねた質問であるため、入学時、前期・後期末の結果を比較することができた。入学時は「全く自信がない」「あまり自信がない」と答えた学生が 9 割近くであった (図 2)。しかしながらオンライン英会話を進めていくうちにその数が減り、後期末には英語を話すことに「まあ自信がある」「自信がある」と答えた学生が 8 割を超える結果となった。オンライン英会話だけが寄与しているとはいえないが、入学前と比べて、話すことの自信につながったことは特筆できる。

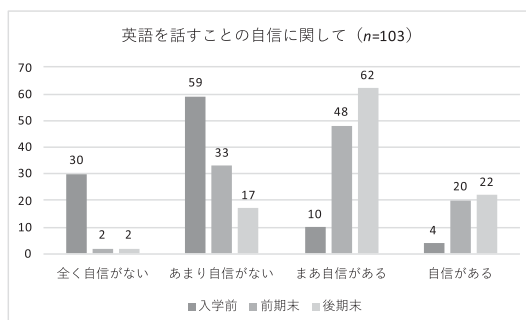


図 2 英語を話すことの自信に関して

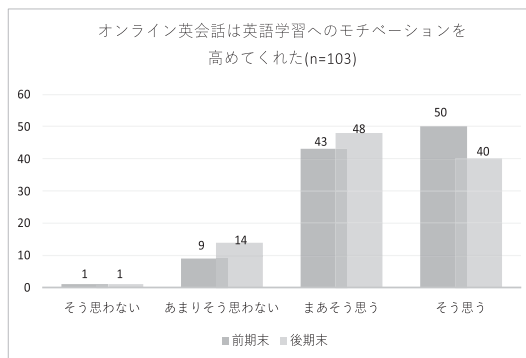


図 3 英語学習へのモチベーションに関して

#### (2) 英語学習へのモチベーションに関して

オンライン英会話は英語学習へのモチベーションを高めてくれたかどうかという質問に対しては、図 3 が示すように、1 年を経ても学習へのモチベーションは高く、オンライン英会話は学習へのモチベーションに寄与していることが読み取れる。

#### (3) 英語学習の取り組みに関して

オンライン英会話を通して自分で積極的に英語を学習するようになったかという質問に対しては、図 4 が示すように、学生たちは英語学習に前向きに取り組んでいることが読み取れる。学生たちの振り返りシートには、「オンライン英会話で自分の英語能力に不足しているものが何であるかを実感できた」というコメントが多々見られた。実際英語を使うことにより、自らの課題を発見し、それを克服するために学習に向かったと推察される。

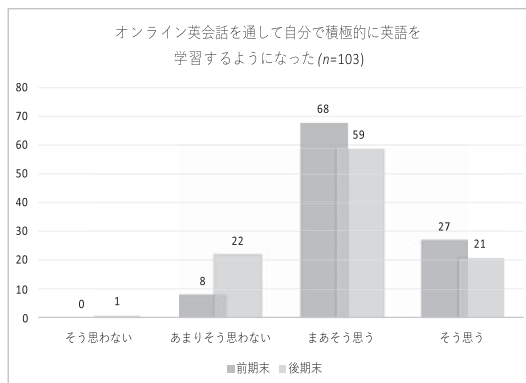


図 4 英語学習に関して

以上のように、オンライン英会話プログラムが 1 年経過しても、学習へのモチベーションや学習への積極性が継続されていることが明確になった。しかしながら学生たちのオンライン英会話への「慣れ」が見られ、今後学習へのモチベーションの継続が課題となろう。

#### (4) オンライン英会話への自由記述回答分析

オンライン英会話や授業に対する学生の評価を検証するために、質問紙には自由記述を設けた。自由記述回答の文を KH コーダーにかけテキスト分析を行った。

## 1) 頻度が高い単語に関して

学生の自由記述の中で頻出頻度が高かった単語を前期、後期それぞれ表2に示す。前期で頻度数が最も高い単語は「英語」(80回)であり、続いて「話す」(70回)「楽しい」(55回),「オンライン英会話」(54回),「自分」(48回),「先生」(45回)と続く。後期でも頻度が最も高い単語は「英語」(67回)であった。続いて,「オンライン英会話」(52回)「授業」(48回)「楽しい」(42回),「話す」(41回)と続き,前期とほぼ同じ単語が上位群に抽出されている。ただ前期で抽出された「緊張」「難しい」などの単語は後期では抽出されておらず,オンライン英会話に慣れてきたことが読み取れる。

表2 自由記述の中で使われた頻度の高い単語の比較(前後期)

前期			後期		
	抽出語	回数		抽出語	回数
1	英語	80	1	英語	67
2	話す	70	2	オンライン英会話	52
3	楽しい	55	3	授業	48
4	オンライン英会話	54	4	楽しい	42
5	自分	48	5	話す	41
6	先生	45	6	先生	25
7	会話	34	7	会話	17
8	機会	32	8	話せる	16
9	授業	31	9	英会話	15
10	話せる	30		感じる	14
11	難しい	20	10	少し	14
12	勉強	18		勉強	14
13	少し	16	13	自分	13
14	緊張	14	14	機会	12
	自信	14	15	自信	11
16	外国	13		人	10
17	今まで	12	16	前期	10
	単語	12		毎回	10
19	慣れる・最初・使う・	11	19	多い	9
	できる・文法		20	たくさん	8

## 2) 後期分自由記述共起ネットワーク図

続いて後期分の頻出頻度の高かった単語がどのような単語と結びついているかを分析するために共起ネットワークを用いて分析を試みた。共起ネットワークは,出現パターンの似通った語,すなわち共起の程度が強い語が線で結ばれ,それがクラスター(ネットワーク)として示される。図5がオンライン英会話や授業に対する学生たちのコメント(自由記述)の共起ネットワーク図である。

図5から読み取れることは主に4点である。以下本文中の(A)(B)(C)(D)は図の(A)(B)(C)(D)に対応している。

## (A) 話すことの楽しさの実感

図5の中の(A)には「オンライン英会話」「英語」「授業」「楽しい」「話す」「感じる」といった単語のまとまりから,オンライン英会話で学生は楽しく話すことができたことが読み取れる。具体的な学生のコメントを抜粋する。

- ・オンライン英会話を1年間やってきましたが,毎週楽しく先生と英語を話すことができました。
- ・海外の方と話す機会はあまりないのでオンライン英会話はとても楽しく取り組むことができました。
- ・はじめは話すのが苦痛で時間がとても長く感じていたが後期からは慣れてきて楽しいと感じ25分があっというまでした。一番楽しい授業でした。
- ・オンライン英会話では,はじめは全然話すことができなかったけど,今は初めの頃より話せるようになりました。

た。とても楽しかったです。

・前期よりも楽しくオンライン英会話を行うことができました。定期的な英会話は必要だと感じました。この授業が必修で良かったと思いました。

#### (B) 学習に対するモチベーションの向上

(B) には「たくさん」「学べる」「知る」「毎回」「自分」「先生」「英会話」「学習」「モチベーション」の単語のまとまりが見られたことから、英会話で先生と話したり、新しいことを学ぶことで、英語学習のモチベーションが向上していることが読み取れる。以下が具体的な学生のコメントである。

- ・英会話は自分の思い通りに話せなかった時、英語学習のモチベーションを上げてくれた。
- ・英会話を通して英語学習のモチベーションが保てた。
- ・毎回のオンライン英会話は緊張しましたが、たくさん話せたときはうれしかった。これからいろいろ学びたい。
- ・海外の先生と話すことで英語学習へのモチベーションが上がったと思います。
- ・先生がオンライン英会話の答えられなかった質問の答え方を教えてくださり、たくさんの表現を知ることができとても役に立ちました。

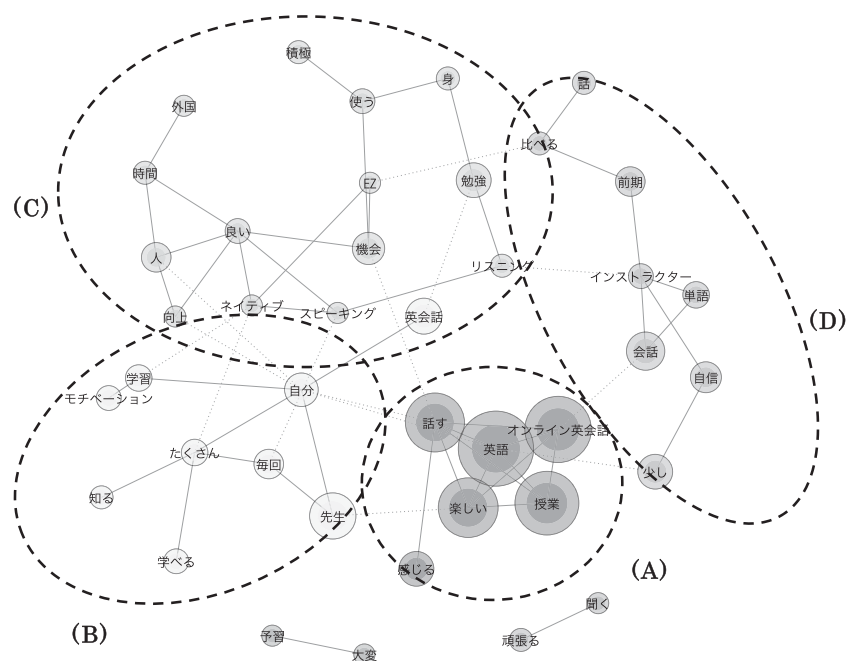


図5 後期授業とオンライン英会話について自由記述共起ネットワーク図

#### (C) 英語を使うことによる気づき

(C) には「機会」「リスニング」「スピーキング」「良い」「ネイティブ」「積極」「使う」等多様な単語のまとまりが見られる。頻出された単語は様々であるが、要はオンライン英会話で自分の英語力（特にリスニングやスピーキング）の向上を実感でき、英語を使うことの効果や自分の学習に何が必要かをモニタリングできていることが読み取れる。以下が学生のコメントの抜粋である。

- ・ネイティブと1対1で授業をすることができて、リスニングとスピーキングに自信がついたところが非常によかったです。
- ・英語を使う機会が増えたので、前よりは話せるようになりました。
- ・実際ネイティブの人と話す機会が自然にとれ、英語力向上の他、自分の実力にも気づくことができてとても良かった。
- ・ネイティブと話す機会を持つことでやる気も出てきました。自分の英会話の力がついたように思います。
- ・中高生の頃に比べてこの授業を通して、英語を話す機会が格段に増え、オンライン英会話ではネイティブの方

と英語で話すので、日本語に逃げてしまうこともなく、恥ずかしがらずに英語を積極的に話すということに関し  
てはこの1年で成長したと感じます。

#### (D) 話すことへの自信

(D) には「話」「前期」「比べる」「インストラクター」「単語」「会話」「少し」「自信」の単語のまとまりから、  
前期と比べオンライン英会話に慣れ、そして話すことへの自信がついてきたことが読み取れる。具体的な学生の  
コメントを抜粋する。

- ・前期に比べて大部慣れてオンライン英会話ができたと思います。
- ・単語だけを使って話すのではなく文にして話すことなど回数を重ねるごとにできるようになったし、これから  
も頑張りたいと思いました。
- ・オンライン英会話を通して、以前よりも英語を話すことが楽しいと思い、また少し自信もつきました。
- ・初めてオンライン英会話を始めた頃と比べると確実に自信がついた。
- ・オンライン英会話を通して英語に対する自信も少しついたので良かったです。

## 4.2 RQ2 に関して

### (1) 外部英語能力試験結果

オンライン英会話プログラムは英語コミュニケーション能力の向上にどのような効果を与えたかを検証するた  
めに、外部英語能力試験（GTEC Academic）の結果を参照する。外部英語能力試験を用いる理由は、学生たちの  
英語能力をより客観的に評価することができるからである。また外部英語能力試験として GTEC Academic を採  
用した理由は、この試験では英語4技能（Reading, Listening, Speaking, Writing）を測ることができるためである。

表3は入学前と後期末に受検した GTEC Academic の結果である。入学前と比べると全ての技能のスコアは伸  
びており、有意差も確認できた（Listening:  $t(113)=4.05, p<.01, \Delta=.34$ , Reading:  $t(113)=6.57, p<.01, \Delta=.50$ ,  
Speaking:  $t(113)=3.62, p<.01, \Delta=.32$ , Writing:  $t(113)=5.61, p<.01, \Delta=.50$ ）。ただし、1年生が履修し  
ている英語授業は複数あるため、この結果は本研究の直接的な結果であるとは言えない。しかしながらオンライ  
ン英会話プログラムもこの結果の一助となっていることは確かである。

表3 外部英語能力試験結果（ $n=114$ ）

	入学前		後期末		$t$ 値	効果量 ( $\Delta$ )
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
Listening	99.92	23.17	107.66	22.60	4.05	.34**
Reading	89.42	26.70	102.68	19.74	6.57	.50**
Speaking	113.23	20.87	119.80	12.19	3.62	.32**
Writing	110.58	25.28	123.19	18.38	5.61	.50**

\*\* $p<.01$

### (2) English Learning Passport における自己評価

English Learning Passport は CEFR（Common European Framework of Reference for Language: Learning, teaching, assessment）を基に本学科用に作成した外国語能力の参照枠である。English Learning Passport は4技能5領域（読む、聞く、書く、話す（やりとり・発表）にストラテジー（やりとり・発表）を加えて、CAN-DO リストを用い  
て、英語で何ができるかを示している。基礎段階の言語使用者として A 1.1, A 1.2, A 1.3, A 2.1, A 2.2 の5つのレ  
ベルを、また自律した言語使用者として B 1.1, B 1.2, B 2.1, B 2.2 の4つのレベル、熟達した言語使用者として C  
1 の1つのレベルを設定している。

学生たちは English Learning Passport に入学時、各学期末にそれぞれの技能領域に関する自己評価をさせた。本  
稿ではオンライン英会話において特に関係のある技能・領域、聞くこと、話すこと（やりとり）、ストラテジー  
（やりとり）のみの結果を記す（図6-8）。

どの技能・領域においても学生たちは、入学時よりも高い評価をしている。入学時のレベルの平均が A 1.2, A  
1.3 あたりであったが、学期が進むにつれ、レベルの平均が A 2.1, A 2.2 もしくは B 1.1 レベルとなっている。自

己評価が高くなるということは自己効力感が高まり、自信にもつながる可能性があるため、今後オンライン英会話を継続することによりさらなる期待ができる。なお本学科では卒業時まで、全員がB1レベルを獲得することを目的としているため、今後外部英語能力試験と自己評価の相関関係の調査をしていくことも視野に入れたい。

## 5. 考察とまとめ

本研究は、英語コア科目 English to Go の授業でオンライン英会話プログラムを取り入れ、海外のインストラクターと1対1で英語による対話を行うことにより、学生たちの英語学習意欲や英語コミュニケーション能力の向上にどのような影響をもたらすかを調査することを目的とした。

学生への質問用紙の分析、英語能力への自己評価、外部英語能力試験の結果など様々な角度から分析を試みた結果、オンライン英会話プログラムは、意欲の向上、英語能力の自己認知、英語運用能力の向上、英語を話すことへの自信が育まれることが示唆された。折しも2020年度は、新型コロナ感染拡大で余儀なく対面の授業ができなくなり、学生たちの学習意欲の低下が懸念されたが、幸いオンライン英会話のおかげで英語を使う機会を提供することができたのは不幸中の幸いであったと感じる。

今後の課題としては、2点ある。1点目は、学生たちは初年度においては高い学習意欲を維持しているが、2年次においても学習意欲をいかに継続させるかが課題である。また著者らは授業担当者として、教員の役割ということも改めて考えさせられた。このような授業形式では、教員の役割は従来のような知識のみを教授するだけではなく、学習ストラテジーや facilitator の役割も担っていく必要があることを実感させられた。来年度は2学年での実施となり授業担当者が増えるため、教員研修が不可欠である。本研究の結果を踏まえて次年度の取り組みにつなげていきたい。

### 注

- 1) e-learning はプログラムに含まれており EZ to Talk 2 と呼ばれている。EZ to Talk 2 はオンライン上で学習ができ、語彙や言語材料の練習だけでなく、リスニングやリーディング問題、音読練習も含まれている。また学習の後小テストが設けられておりこの小テストに8割以上合格しなければならない。
- 2) ブレンドマテリアルは EdulinX が提供する教材である。授業で使えるよう作成されている。
- 3) タスクの繰り返は、学習者のパフォーマンスをより流暢にそして複雑にするのに有効だとされている (Bygate, 2001: Muranoi, 2007)。

### 引用文献

- Bygate, M. (2001). Effects of task repetition on the structure and control of oral language. In M. Bygate, P. Skehan, & M. Swain (Eds.), *Researching pedagogic tasks: Second language learning, teaching and testing* (pp.23-48). Harlow, UK: Longman.
- Muranoi, H. (2007). Output practice in the L2 classroom. In R. Dekeyser (Ed.), *Practice in a second language* (pp.51-84). Cambridge University Press.
- 江口真理子 (2019) 「オンライン英会話は スピーキング能力と相関するか」『総合政策論叢』第38号, 41-52.

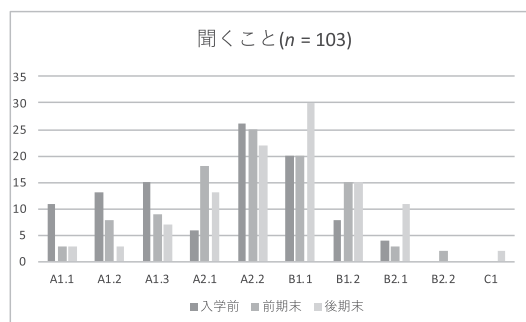


図6 聞くことに関する自己評価

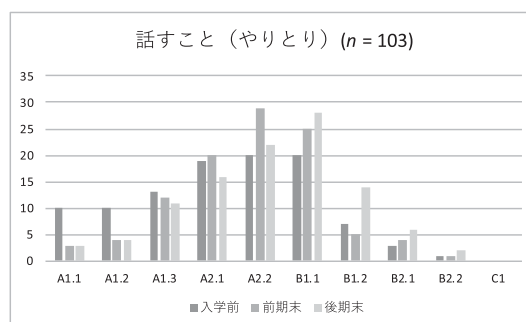


図7 話すこと (やりとり) に関する自己評価

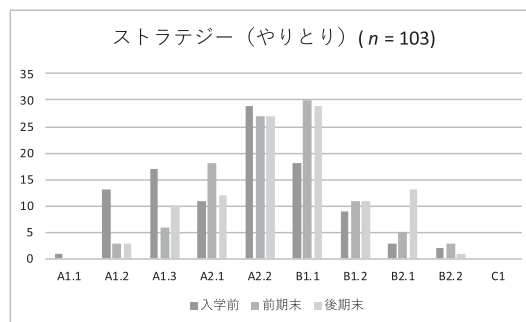


図8 ストラテジー (やりとり) に関する自己評価



- 深田將揮（2019）「オンライン英会話と e ポートフォリオを活用した大学英語授業の試み」『畿央大学紀要』第 16 巻第 1 号，23-30.
- 畠山均（2017）「オンライン英語学習プログラムの成果と課題」『純心人文研究』第 23 号，227-241.
- 小林翔（2020）「オンライン英会話学習によるスピーキング不安と意識の変容」『茨城大学教育実践研究』第 39 号，89-102.
- 大和田和治（2016）「東京音楽大学におけるオンライン英会話プログラムの導入とその教育的効果の検証」『研究紀要』第 39 号，53-66.
- 渡慶次正則・Fewell, N・津嘉山淳子・Kuckelman, M.（2017）「スカイプ・オンライン英会話の授業外利用の効果と課題，動機づけ -M 大学英語専門中級レベル学生の事例-」『名桜大学総合研究』第 26 号，9-20.